

どろり 来ぶろり

2011 春
No.87



特集

心に効く!
わがしのサブリ本

館長
コラム

目白不動と青柳文蔵

図書館長 高埜利彦

目白の地名は、目白不動に由来することを、多くの人知っている。目黒が目黒不動に由来するのも同様であるが、江戸の五不動の残り目赤・目青・目黄不動に由来する地名は聞くことがない。目白不動堂（新長谷寺）は「江戸名所図会」にも描かれ、現在の文京区関口の台地上（椿山荘の近く）にあって「境内眺望勝れたり、雪景色よし」と記され、境内にある料理屋から早稲田田んぼの雪景色の良さをうたっている。

目白不動堂は太平洋戦争の戦災で焼けたが、本尊は金乗院（高田2丁目）に移され現存する。

金乗院は、目白通りを東に向かい鬼子母神の信号を右に曲がり宿坂と呼ばれる急坂を下った所に存在する。金乗院を訪れると、本堂右手に石段があり、裏手斜面の墓地に続く。墓地には慶安事件の首謀者とされ磔となった丸橋忠弥（1651年没）の墓があるが、石段を上ってすぐ左手に青柳文蔵の墓もある。

青柳文蔵は仙台の儒医の息子に生まれ、江戸に出て書籍3万巻を集め、書庫を作って青柳文庫と名付け広く利用に供した。江戸時代の私設図書館と見なされる。文蔵は天保10（1839）年79歳で没し、金乗院に葬られた。

生き方に影響を受けた本

『ボラン：私はいかにして研究を進めたか』
H. C. Brown 著 守谷一郎訳
東京化学同人 1975
(大学図・書庫 438/55)

自分の進路を決めたとにかく面白い本

理学部化学科教授 持田邦夫
化学のどのような道に進むかと決めかねていた大学3年時、先輩が読みなさいと勧めてくれた一冊がこの本であった。Brown 先生が切り開いた化学—人生の本であった。これまで読んできた文学書とは異なり、書かれている内容がストーンと入る学術書である。新しい化学の分野を苦学して開拓し、系統化したすばらしい本であった。私はこの本を読み、人が行っていない新しい元素を研究し、体系化しようと決めた。

『100万回生きたねこ』
佐野洋子著 講談社 1977

今だからこそ読みたい人生の教科書

文学部史学部 藤井萌
初めて自分一人で読んで、そして初めて物語に悲しい気持ちを感じた本です。この本はねこの死で終わるのに、むしろ明るい読後感ももてる不思議なお話だと思います。生きるとは、死ぬとは、愛とは、人生とは…様々な場面でこの絵本が思い出されるのは一冊に普遍的なテーマが詰まっているからでしょう。本を読む面白さや大切さ、考え方のペースを教えてください。自分の子供にもぜひ与えたい絵本のひとつです。

勇気をもらった本

『一瞬の風になれ』(全3巻)
佐藤多佳子著 講談社 2006
(大学図・1F 開架 Best/2007)

走りたくなくなります。何もかも吹っ切って。

スポーツ・健康科学センター准教授 羽田雄一
高校から陸上を始めた主人公が、チームメートと共にインターハイ出場を目指す物語。高校生の陸上に対する、特に4継(4×100mリレー)に賭ける思いがひしひしと伝わってきます。私も同じく、インターハイを目指して走る高校生でした。これを読むと、当時のような情熱が蘇り、不安や悩みなどどこかへ吹き飛ばしてしまいます。ただ走ることに純粋に楽しかった頃の様に。無条件に熱くなれる、これが私にとって勇気をくれる本です。

『コーチ』
マイケル・ルイス著 中山宥訳 ランダムハウス講談社 2005
(女大図・開架 783.7/18)

生きていくうえでいちばん大切な教え

学長室経営企画課 久保れみ
全米ベストセラー作家が学んだ、生きていくうえでいちばん大切な教え。厳しく、ときに優しい、魔法のように子供たちを変えていく鬼コーチ、フィッツ。人生に真正面からのぞんだとき必ずぶつかる二つの大きな敵—不安と失敗—にどう立ち向かうのかを教えてください。そんなフィッツの言葉に勇気を貰う。「一人前になるとは、逆境に置かれたとき、逃げ出したくなる本能と戦うことだ」

『グッドラック』
アレックス・ロビラ、フェルナンド・トリアス・デ・ベス著
ポプラ社 2004

一歩踏み出すきっかけ作り

大学院政治学専攻政治学専攻 小林孝也
誰にでもやる気が出ないときがあるとあります。当時、高校生であった私も授業をさぼったり、部活を休んだりしていました。「頑張らなければいけない」とは思いつつもなかなか行動に移すことができませんでした。そんな時「グッドラック」に出会いました。シンプルなストーリーですが一歩踏み出すきっかけを作ってくれる本だと思います。「最近目標が…」「頑張らないといけないのにやる気が…」という方におススメです。

『紫の履歴書』
美輪明宏著 水書坊 1992
(法経図・書庫 289/1234)

※表紙の画像は『紫の履歴書 新装版』水書房 2007刊

フィクションよりもドラマティックなノンフィクション

施設部施設課 中石万莉
シャンソン歌手や俳優等として華風に活躍し続ける美輪明宏さんの、波乱に満ちた半生を綴ったエッセイ。テレビなどで拝見するとちょっと浮世離れた雰囲気を感じていらっしやる美輪さんにも、浮世で地を這うような生活を強いられた時代がありました。どんな苦境に喘いでもあくまで自分らしく深く歩み続ける美輪さんの姿には、真のエレガンスが備わっています。真に満ち足りた生とは何かを見失いそうになったときに手に取ってみて下さい。

心に効く！ わがしのサブリ本

だれかに背中を押してもらいたいとき、新たな学びを得たいとき・・・、一冊の本が、何かのきっかけになるかもしれません。そこで今回は、本学の教職員・院生・学生に症状ごとに「心に効く」本を紹介してまいりました。このなかからあなたにとってサブリメントになるような本は見つかるでしょうか。

『ノルウェイの森 上・下』
村上春樹著 講談社 2004
(大学図・1F(上) Kodansha/ 6/23(下) Kodansha/ 6/24)

本から目を離し顔を上げれば、沸々と闘志が湧いていた

文学部哲学科 川井貴史
—「どれくらい私のごとき好き？」と緑が訊いた。
「世界中のジャングルの虎がみんな溶けてパターになってしまいうらい好きだ」—
このセリフは私の好きな言葉の一つだ。なぜか。ステキだからだ。村上春樹の本には魅了されっぱなしで、いつしかこんなステキなセリフを言えそうな自分になった気にさえなる。読了の前後で、全くわたしが異なる感じさえした。最初は違和感が強く、すぐに読むのを諦めてしまった。けれども、何度か試みてついに読了し「もっとこの本に早く出会えていれば」と心の底から思う。生きるのも死ぬのも厭で、慣性の法則に従う物体のように「生きていた」わたしは、わけもなく、夕日に向かってただひたすらに走り出すほどの力が湧いた。映画化されて間もないし、一度全力で読んでみてはどうだろう。最終頁までいき、本を閉じたときにはなにかが変わったと思うかもしれない。わたしのように闘志が湧く人もいるかもしれない。

『船に乗れ！I 合奏と協奏』
藤谷治著 ジャイブ 2008

青春度100パーセント！！

女子大学教務部教務課 中島晴彦
私立高校の音楽科に通う高校生の学校生活を描いた小説で、三部作の第一作目。あたまでっかちな主人公が音楽や恋愛を通して成長していくのがとても微笑ましいです。読んでいて恥ずかしくなってしまうくらい純粋で一生懸命な主人公の行動から「自分もがんばろう！」と思える一冊です。

『カンパセーション・ピース』
保坂和志著 新潮社 2006
(大学図・1F 開架 Shincho/ 6/11/4)

ストーリーも、起伏もない—— だけど、だから、面白い

大学図書館 佐藤飛鳥
世田谷の築50年の一軒家を、そこに住んだ人たちを、三匹の猫を、または横浜ベイスターズを、「私」の立場から描写していく小説。場面場面での登場人物たちのカンパセーションは珠玉であり、本作のテーマである「記憶の不確かさ」という観点から、記憶それ自体について、それに付随する視線(点)の問題や、「死ぬということ」について、「私」の考察が非常に深く描かれている点が推薦理由である。「小説に出てくる言葉」と「小説を説明する言葉」はまったく異なるものであるという作者に多い多くは語らないが、「成る程」と思いつつながら読める良書であると思う。

『茶の間の正義 改版』
山本夏彦著 中央公論新社 2003

辛口です。

大学図書館 米田岳史
1967年の発行だが、今読んでみても内容に古さを感じない。好き嫌いが分かれる本だが、世の中の風潮や価値観をばっさり切り捨てる内容は非常に爽快。作品の中の「首相の月給は安すぎる」というコラムは、テレビや新聞にはない視点がある。自分が持っていた価値観をばっさり切り捨てられると、不思議と物事の見方も多角的になる。世の中をちょっと斜めから見る事ができる本。

目からウロコの本

『WHO AM I? WHAT AM I?』
SHIHO 著 マガジンハウス 2006

“自分”は探すものではなく、
創るものである。 大学院自然科学研究科化学専攻 岩波彌生子
「なりたいたい」ではなく、“なる”、自分がそう決めたら、すぐ始める。この本は、やりたいと思ったことは怖がらずに何でもチャレンジするべきだ、ということを見せてくれました。自分の気持ちにいつも素直に、自然体で生きているSHIHOさんの姿は、とても素敵だなと感じます。

『資本制生産に先行する諸形態』
(『経済学批判要綱』所収)
カール・マルクス著 横張誠、木前利秋、今村仁司訳
筑摩書房 2005
(マルクス・コレクション3) 大学図・1F 開架 363.8/249/3)

アジア研究をはじめたきっかけになりました

文学部史学科教授 鶴岡和幸
私が学生時代にアジア史をめざすきっかけになった書です。「資本論」の附録のようなノートです。ヨーロッパの鏡としてのアジアを置き、民主に対してアジア社会の専制権力の秘密を解き明かしました。しかし実はそのようなアジアはヨーロッパにもあるという認識も見え隠れします。21世紀の世界の行方は、資本主義を超え、アジア的な社会を超えるものになりつつあります。改めて古典のこの本から学ぶことがあるでしょう。

図書館員がオススメする

世界が広がった本

『DK Eyewitness Top 10 Travel Guides』
(電子書籍)

London, New York, Parisを目白から楽しむ

～電子書籍の旅行ガイド-無料! 大学図書館 川中はるか
図書館にある『地球の歩き方』シリーズは旅行ガイドとして有名ですが、電子書籍 & 英語の旅行ガイドはいかがでしょうか? 学内PCからアクセスできる『DK Eyewitness Top 10 Travel Guides』シリーズは都市ごとにオススメ Top 10を紹介、また“建築” “子供が喜ぶ”といったテーマでの Top 10もあり、カラー写真が多くバラバラと見ているだけでも楽しめます。アクセス方法: 大学図書館 HP → データベース NAVI → ProQuest ABI Inform → “Safari Business Books online” を選択 (詳細は2Fカウンターへお尋ね下さい。)

『スラムダンク勝利学』
辻秀一著 集英社インターナショナル 2000
(大学図・1F 開架 780.4/29)

今できる最善のことに全力投球!

大学図書館 稲垣幾世枝
著者は、勝利を「今、自分のできることに全力投球し、それにあった結果を得ること」と定義しています。そして、結果を恐れずに「やるべきこと」と「今」に集中し、「不安を払拭」して「自分にふさわしい結果がでるの信じる」ことができれば、誰でも勝利を手にすることができると述べています。大学生生活においてもさまざまな難関にぶつかることもあるでしょう。そんなときに役立つ心の持ち方を教えてくれる一冊です。

『政治の成立』
木庭顕著 東京大学出版会 1997
(法経図・書庫 231/21)

薦めないけど、 紹介したい本があります。

法学部政治学科教授 中田喜万
自分の専門の政治思想史や日本思想史ではいつもウロコを落とされてばかりなので、それ以外の分野から1点あげるとすれば、この本です。〈政治〉とは、ありふれた権力現象でも、逆に現代のように〈民主政〉と混同されることでもなく、ある特定の内容を含意すること、それを知るため、人類最初の〈政治〉を経験した古代ギリシア、しかもそこで政治思想が誕生する以前に遡らなければならないことを、政治学者に突きつけます。難題です。決して学部生を巻き込むつもりはありません。ただ、大学にそういう世界があることを知っていて損はないでしょう。

『笑いを売った少年』
ジェームズ・クリュス著 森川弘子訳 未知谷 2004

まだ笑うことのできる、 すべての人々のために

学生センター教務課 筒井啓之
14歳の少年が自分の笑いを取り換えに大金を手にするも、笑顔の大切さに気づき、取り戻すために奔走する物語。ドイツの児童文学という謳い文句に誘われて読み始めたら、いい意味で児童文学らしくなく、大人のための児童書と言った雰囲気です。「お金より大事なものがある」というのは、使い古されたテーマかも知れませんが、この本を読むと、また違った視点から捉えられると思います。今まで読んだことのないような、児童書です。



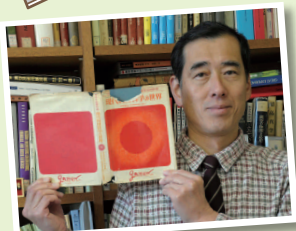
「アカデミック・スキルズ」開講記念 学長寄稿 便利な時代だからこそその知の技法

学長 福井憲彦

高校までに「調べ学習」とか「課題探究」の経験を持った学生もいるだろう。しかしその多くは先生から課題を与えられたかな、と想像される。大学でも、教員から課題を出されてレポート提出、という場合は多い。それにまず、さまざまな基本的知識は学び取らなければ話にならない。しかし大学に在る間に、なにより身につけてほしいし、卒業後にこそ一生大切なのは、自分自身で問題を明確にして情報を集め、いわゆる「ガセネタ」をふるい落としして的確な内容を見分け、論理的に考え、発信できる力である。「どうしてそう考えたの」、「なんとなく」では、誰からも信用されない。ネット上で情報は簡単に集まるなどと慢心した

ら、大間違い。情報の出所も問題だが、「過ぎたるは及ばざるが如し」で、情報の内容を判断する力が問われる点は、紙ベースの情報が中心であったわれわれの学生時代よりかえって厄介かもしれない。なにせわが学生時代は、「メモリーに入れておく」などはもちろん、「とりあえずコピーしておくか」もありえない。ひたすら読み、使えるか否かを判断して手で写す、という、まだ中世かというような調査であった（コピーはあったが高価すぎた）。情報機器類が発達した今だからこそ、かえってアカデミック・スキルといわれる知の技法を身につけられるかどうかは、勉学のみならず人生にとって、決定的に重要だ。

「アカデミック・スキルズ 大学での基礎となるスキルの習得」平成 23 年度開講 第 1 学期・水曜 1 限
※ 詳しくは平成 23 年度シラバスをご確認ください。 <http://syllabus.gakushuin.ac.jp/syllabus.html>



「宇宙次元の科学」ジョージ・ガモフ著 伏見康治、鎮目恭夫訳 白揚社 1959
(大学図・書庫 420.1/13/3)



人に本棚を見せる機会、意外とないですよ。ちょっと恥ずかしいけれど自慢したい、わたしの本棚。第 2 回目となる今回は、理学部教授の荒川先生にご自身の本棚を紹介していただきました。

小学生の頃の本も残っています

理学部物理学教授 荒川一郎

本を捨てられない性分のため、子供の頃からの種々雑多な本が溜まり溜まって本棚は十カ所ほどに分散している。ある程度まとまりがあるのは、趣味の山関係の本である。山登りは不思議なスポーツで、その特異性の一つは本が多いことである。文学、美術、音楽、自然科学、民俗、地理、それぞれの専門家の山好きが、山を題材に様々な書を物したためである。小島烏水、深田久弥、E. Whymper、E. Javelle などの山岳紀行から始まって各方面に読書の範疇が広がっていく；川喜田二郎、C. Levi-Strauss、宮本常一、雑誌「アルプ」で活躍していた串田孫一や辻まこと、等々。

小説類の新刊は、面白い本に行き当たる確率が低いので余り読まない。古典やすでに名の知られている近代の本を、作者ごとにまとめて読んできた。効率は良いのだが、時流からは遅れるという難点がある。

自分の研究分野の専門書は多いが、皆さんの興味を引く本は少ない。今の仕事に進むきっかけになった大事な本の一つを紹介しよう。G. Gamow の「現代物理学の世界：宇宙次元の科学」（白揚社、1959）、少年少女向けの現代科学の啓蒙書である。小学 6 年生の時に表題のかわさきに惹かれ、お年玉をはたいて購入した。

